



近年作品が大型化しており、その勢いは自分のもつ作業場である工場を埋めつくす勢いで、とうとう駐車場の一部を作品の展示場としてしまった。

また、作風としては自分で「妖怪」「深海」などのテーマを設定し作業場である自らの工場で開催を行うべく、制作を行っている。

会期中、その造形の奇抜さで、フェスティバルへの観客を引き付けてくれた。流木のもつ自然の造形は、作品となっても力を失わない。むしろ、上林のフィルターを通して不思議な魅力を放つように見える。また、ビー玉で作られたつぶらな瞳はその造形の魅力と相まって、何か自分に語りかけてくるように感じる。



上林 比東三(かんばやし ひとみ)

昭和27年生まれ。いさざ会館を開いてしばらくしてやってきたおじさん。作品を見せに持ってきてくれたのだがそのクオリティは感動ものであった。

廃材や流木を使った細かい作品を創る。いさざ会館主催の「西舞鶴国際アートフェスティバル2016」で個展を開催し、作品を人に見てもらう楽しさを憶える。それ以来作品が少しずつ大型化。またテーマを持った作品展を自主的に開催する。

流木を主な材料とし、その形からインスピレーションを得るなどし素材そのままの形を活かす。または「そう見えたらひたすらその形になるまで」プラスし、余計なものをけずり作りだす。自然や生き物を愛し、作品にはそのこだわりが細部に宿る。

作品はまさにファンタジーの世界へと見るものを引きずりこむ。作品には名前とストーリー、または他の作品との関係性があったりする。

2016 「西舞鶴国際アートフェスティバル2016」

2018 「未来美展2(鹿児島)」

2021 『平成美術』出展(京都市京セラ美術館)





彼はいさざ会館用務員が教員をしていたときに転入してきた。少しずつ新しい環境に慣れ始めたころ、家で作っている自作のペーパークラフトを持ってくるようになる。嬉しそうに自らの「KTR(旧丹後鉄道の略称)愛」を語り、作品の細部へのこだわりを見せてくれるのだ。この表情や語り口は「生徒」でなく「表現者」であった。どうにか彼のような人を評価できる場所はないか考えるうち、いさざ会館設立の構想に至ったのだ。

彼の作品の魅力は身近な材料で、とてつもない観察と下書き、作業の時間を経ていることだ。そこに「かしこい」アドバイスを挟む余地はない。彼自身、自分の作品の魅力はそこにあることを無意識に知っているのだ。小さな作品は自らの内面を究極に外へと発信している。

今回の展示はその魅力がわかるようにその魅力がわかるように下書きや、ノートも加えた。



丹後 鉄郎(たんご てつろう)

平成12年生まれ。京都市出身。

きっと日本一丹後鉄道を愛する若者。緻密な作品は彼の慎重で正確さを大切にする性格がうかがえる。プラレールに自分の好みの車両がない場合、ペーパークラフトを自作し着せ替え作品などを作る。また「虹幻交通」という架空の設定を自ら想像し作品を作っている。

最近では、CADを駆使し、自分で撮影したバスの写真をもとに正確な縮尺の展開図を作成。それをもとに、クラフトを制作している。

2016「舞鶴をたずね展1」

2016「西舞鶴国際アートフェスティバル2016」

2018「未来美展2(鹿児島)」

2019「西舞鶴国際アートフェスティバル2019」個展



例えば、いわば「写真のような絵」を目にした時、写真だと思っていたものが実は絵だと気がついて驚いた経験はあるだろう。彼の作品をみると、まさにそんな脳の興奮を得ることができる。

小さい絵ながらもどこまでも細かく描かれており、目がそれを追ってゆき、意識は絵の遥か奥まで運ばれていくのだ。しかしながら、その絵からは空間を感じるのではなく、ただただ彼の狂気ともいえるこだわりぶりに驚かされるのだ。どれだけ時間がかかったのだろうか、どのようにしてそっくりに描いているのだろうか、なぜそこまでこだわるのだろうか。その絵は鑑賞者にさまざまな「謎」を問いかける。人間の「不思議さ」を存分に感じることができる。
今回はその細部をもっと楽しめるようにルーペを用意した。



三須 貴行(みす たかゆき)

三須の作品を初めて見たのは東舞鶴にある「よのなか塾」のSNSを見ていた時だった。写真に 写ったホワイトボードに超絶にうまい北斗の拳が描かれていたのだった。訪れたときにだれが書いているのか尋ねると、彼だったのである。

すぐに紹介していただき連絡を取った。2回目の舞鶴をたずね展でホワイトボードに作品を描いていただいた。しかし、ホワイトボードの制作は彼にとっては遊びのようなもので、実は丁寧に色鉛筆を駆使し作品制作をするアーティストであることをこの時知った。

彼の制作のスタイルであるが、スマホで撮った写真を見ながら精密に絵を描く。その細かさや正確さはスマホの拡大機能があることで、描きこめる限界までこだわって描く。

2017 「舞鶴をたずね展2」

2018 「未来美展2」(鹿児島)

2019 「西舞鶴国際アートフェスティバル2019」個展





地球環境やSDGsの問題に深く関心を持ちながら、舞鶴で「リメイクアーティスト」として活動している。しかしながら、彼の作品の細やかさや、独創的な発想は独学ならではの自由さを持っている。彼の関心は時として、自身の発想の枠を軽く飛び越え、作品を手取るものにししっかりとメッセージを残していると思っている。

今後の活動がとても楽しい作家である。

堀上 武志(ほりかみ たけし)

昭和61年生まれ。服飾系専門学校に通っていた姉の影響を受け、ファッションに興味を持つ。舞鶴という田舎では自分の買いたい服がなく、自分で作ってみようと思いつく。古着ブームであつた高校生の時にリメイクコンテストに応募し、全国で2位の成績を残す。

東京に進学し腕を磨き、多数イベントに出演。

現在、舞鶴にて「大量消費社会に疑問を持つ1点もののリメイクアーティスト『SarAeruC(さらえる-ク)』」として活動中。

2008年『雑誌CHOKICHOKIリメイクコンテスト』全国2位

2015年『JDAPリメイクアーティスト』資格取得

2021年『いさざArtAwad』審査員賞受賞

2021年『アトリエHIKITSUGI 全国リメイクコンテスト summer 2021』HIKITSUGI賞







ロッシー

1949年、舞鶴市生まれ。学生時代に出会ったマンガ。一枚の絵でこんなに多くの表現ができることに感動。読売国際漫画大賞で受賞したことがきっかけで火が付き、それ以来自分でマンガを描き続けている。

表現は、多くは一コマ漫画であり、ストーリーでなくユーモアやシャレのきいたマンガを描く。また、書く文字やイラストは温かみがあり、DMやイラストの制作依頼が地元友人などからあつたりする。とくに地図はとても分かりやすく、手書きで多くの情報をわかりやすく表現できるのは、マンガの経験から培われたと思われる。

現在はイラストや漫画の領域を超えて「即興画」を描き、線の面白さなど味わったり自分の内面と対話しながら描くこと自体を楽しんでいる。

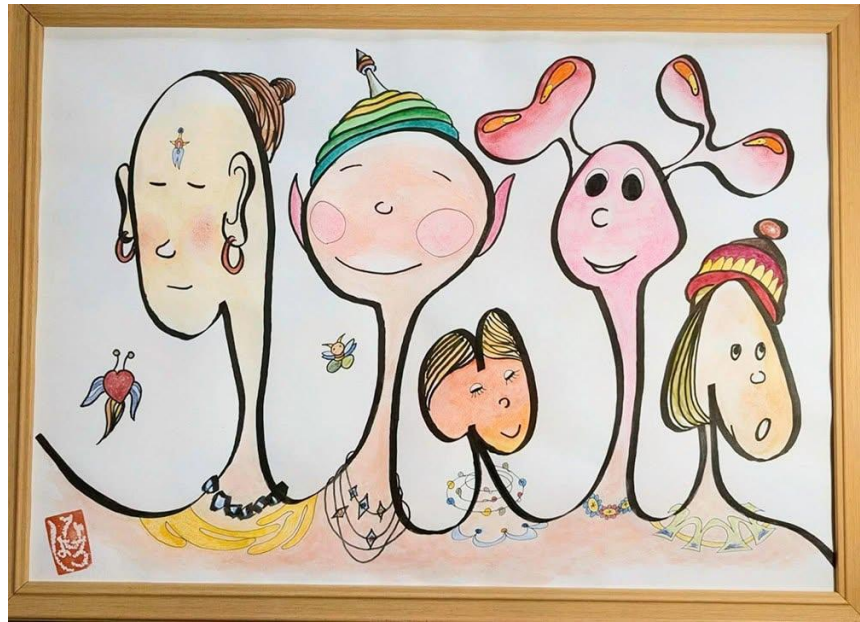
趣味の範囲がとても広く、オカリナ演奏やラジオパーソナリティとしても活躍。

一コマ漫画や似顔絵などのイラスト作品を長年手掛けてきた。しかし、最近の注目すべき作風は本人が「勝手に手が動く、自由な線が描けるようになってきた」というのびのびとした線が美しいシリーズである。自由なフォルムやラインから発想され生み出された不思議なモノたちは、画面の中を自由に泳ぎ、動き出すように見える。

長い画業を経てたどり着いたこの境地は、現在表現活動に取り組む人たちへの熱いメッセージになるだろう。









かんとろー
舞鶴で活躍するシンガーソングライター。いさざ会館の開設当初から様々なイベントにかかわっている。自らライブやレコードカフェなどのイベントをいさざ会館で主催するようになり、現在では京都府北部でのさまざまなライブハウスにおいてその存在感を放っている。

自分の生活や日常から紡がれた詩を磨き上げたブルースに乗せて観客に届ける。その作品たちは今まで自身が出会ってきた音楽の影響を感じさせつつ、唯一無二の表現となっている。



丹後中丹

風土
愛楽

近所の公園に立つそ

の「樹」は、京都府で最初に植樹されたメタセコイアであったという。舞鶴の戦後の復興から現代までをずっと見下ろしてきた樹だったが、2018年12月に切り倒された。見慣れた風景の変化に怒る人や嘆く人がいる一方で、まったく気づかな

かったという人もいた。日常に「無自覚」でいること、当たり前がいつまでも続くという幻想を抱えて我々は生活しているのだろうか。そんなまめぬい日



いさざ会館用務員 浦岡 雄介

メタセコイアのうた



み、毎朝犬と散歩をしている人がいる。彼はその樹の末路を憂い、落ちていた枝や実を拾い集め始める。そして「メタセコイアのうた」もつくった。

もし彼がいなければ、この樹の育んできた歴史と物語は完全に断たれていただろう。しかし、このうたには我々の記憶や思い出からその樹をよみがえらせる力をもっていた。だから19年11月にこの切り株の前で彼のライブを企画した。

「夏の日照りにその

身を晒し そこに木陰をつくり 冬の星座を従えて 雪のひさしとなる／あなたがそこに居てくれたことが今のわたしの喜び あなたがおくった季節の数だけ ありがとうの思いを」

地域に根差すプライドを破壊するのは、いつでも我々の「無自覚さ」だ。その切り株すらもうなくなってしまう。このままでは地方は空っぽの街になってしまう。日常も暮らす地域も我々のものなのに。



鈴間章治

独学で制作を開始し、画業は40年を超える。仕事場の事務作業のごみとしてでるパンチの小さな丸い紙片を利用できないかと思い制作を開始する。現在は自分の好みの色の紙をで紙片を作り制作する。「パンチウェイストアート」と名づけ、自主的に作品を発表していた。現在はインスタグラムでも作品を発表している。

絵のモチーフは様々で、風景や仏像などの写真をもとに製作することもある。また、芸術作品の模写作品もある。丸い紙片にこだわるので、表現に限界があると思われるが、独自のテクニックを駆使して解決しようとしている。



